

たいしょう と てんかゆ ゆ がい あん へい たい がく  
大象を執れば、天下往く。往きて害あらず、安、平、大なり。楽と  
じ かかく とど みち げん い たんこ そ あじ  
餌とは、過客も止まる。道の言に出だすは、淡乎として其れ味わい  
な な み み た た き き き た  
無し。これを見るも見るに足らず、これを聴くも聞くに足らず、こ  
れを用いて既すべからず。

【大体の意味内容】大いなる気象、つまり目には見えないが確かな象をそなえた風のような「道」の働きに倣って政治を執り行えば、天下万民の営みは淀むことなく運ばれてゆく。そうした運営に障害はなく、すべて平安で、おおらかな陽気に世は満たされる。音楽やごちそうがあると、旅人も足をとどめる。しかし「道」を言葉で表現しても、それは淡泊なもので、通常の感覚で味わうことはできない。注視しても、見ることはできず、傾聴しようとしても聞き取ることができない。しかしその効用は、いくら用いても尽きることはないのである。

『日本はエネルギー大国だ』(二〇一一年)という本を読んだことがあります。島国日本には黒潮、対馬海流、千島海流、リマン海流と、四つの「海の流れ」があり、その力を利用して発電しようというアイデアの実用化に挑む人たちのドキュメントです。海中に大きなマグロのような形のスクリューを設置して潮流によって回転させ発電しようというもの。これが実用化されれば海流という、永遠に働く動力を利用してエネルギー供給できることとなります。太陽光発電や風力発電、地熱、潮汐など、ほかの自然エネルギーとも組み合わせれば、原発はおろか、火力発電も不要になってもしかも余剰が出るほどのエネルギー大国になれるというわけです。

原発などで金儲けしている勢力には受け入れられず、いまだに実用化されていないようですが、まさに「大象を執る」発想は素晴らしい。ぜひ実用化されるといいですね。  
エネルギー利用といった「何かの役に立つ」話とは別に、水とか風とかの自然の働きに感動したり驚かされたりすることはよくあります。

まだ赤ん坊だった子どもを抱っこして田園地帯を散歩していた時のこと。急に雨が降ってきたの



で急いで家に帰ろうとしましたが、広大な田園に張られた水にはねる雨音がだんだん大きくなって、はっとして立ち止まりました。一つ一つのきれいな水滴音が、何千、何万、いや、何億、何兆かわかりませんが、壮大な交響樂シンフォニーとなってその場の宇宙に鳴り響いていました。傘をさしていたら傘に当たる音で聞こえなかったものすごい音楽が、こんな風に日常的に奏でられているのだと知って感無量になりました。しばらく子どもとずぶぬれになりながら聞きほれていましたっけ。

また、たわなに実った稲穂のじゅうたんが、風の渡る姿を見せてくれたこともありました。こちらに向かってきたり、向こうへ吹き抜けていったり、渦を巻いたの…

北アルプスの燕岳ツバメには、風水が数億年かけて作り上げた花崗岩かこうぎやんの彫刻が、蒼空そうくうに屹立きつりつしています。

槍ヶ岳の肩に広がる雲海をちぎって、天蓋てんがいのキャンバスに気ままな文様もんやうを描いたりもする。

そんな風水の天才的造形力には、心底参ってしまいます。

